研修報告書

平成 27 年 2 月 6 日
所属：松江県土整備事務所
門脇昌純

【研修内容】

・第 5 回八雲国際演劇祭運営本部スタッフ
・しいの実シアター公演ボランティアスタッフ
・コミュニケーションワークショップ体験
（八雲小学校 3 年生）

【研修の感想】

はじめに

まず初めに、この度の研修でお世話になった NPO 法人あしぶえ及び八雲の皆様に謝らなければならないことがある。

それは、しいの実シアターの場所と、国際演劇祭が八雲で開催されていたという事実（それも 15 年も前から！）を知らなかったことだ。なお、これらについて知る経緯を辿ると、研修の存在を知る→国際演劇祭の存在を知る→研修であしぶえの方々にお目見えするためにしいの実シアターへ初めてお邪魔し、場所を知る、という順だ。９年間松江を離れていたとはいえ、お恥ずかしい限りである。あしぶえ及び八雲の皆様、どうかこの無知な小生をお許しいただきたい。

あしぶえについてほとんど知らなかった分際だが、劇団について事前に調べるほど興味深い活動をされており、派遣先として希望させていただいた。そして晴れて希望が叶い、あしぶえでお世話になるきっかけを得ることができた。

今回が初めての参加となるので、長らく八雲国際演劇祭に携わってきた方々に比べればまだまだ表面を撫でた程度しか関われてない。

短い期間ではあったが自分なりに今回の研修で得られたことを、１．地域協働、２．人づくりの役割を担う芸術、３．国際（異文化）理解、の 3 つをキーワードとして、ここに報告させていただきたい。

単なる用語ではない地域協働

地域協働という言葉については、自治体や各団体（特に自治体）が用語として掲げるものの、

なかなか具体的な形になってない場合が多いように思う。

それでは、あしぶえの場合はどうか。八雲国際演劇祭という一大プロジェクトの大きな支えとなっているのが無償ボランティアの方々なのだが、この約半数が八雲町民で形成され、八雲町以外の松江市民を合わせれば９割を超える。松江市全体から八雲町を差し引いた人口が約２０万人人に対して八雲町の人口が約７千人。当演劇祭が旧八雲村時代から始まったとはいえ、ボランティアスタッフに占める八雲町民の人口あたりの参加人数の多さがまさに地域協働を体現した組織となっている。これをいかにして形づくってきたのか。

その重要な答えの一つが八雲国際演劇祭の開催の目的と活動指針に示されていた。この活動指針は八雲国際演劇祭を実施するうえで、根幹をなすものだ。

その中で地域協働を実施するうえで非常に重要なフレーズがあったので以下に抜粋する。

・共に知恵を出し合い、共に汗を流して…楽しみます。
・対話を重ねて最善の方法を見つけていきます。
・「振り返り」と「改善」

一つ目からうかがえることは、頭だけではなく体も動かすことだ。これが汗をかくということ。そして同時に、共に頭と体を動かした結果得られるもの、八雲国際演劇祭では劇や交流を、楽しむこと。楽しまなければ継続はしない。

次に二つ目だが、考えの違いや文化の違いはどこにでもあるので、落としどころを見つけるために対話を重ねる。対話を重ねるということは、自分を表現すること。それと同時に相手を尊重すること。そしてそれぞれのアイディアや意見を集約し、妥協点を探り、ものにするという作業。想像する限りこれはとても労力と根気が必要となる作業であると思う。

そして三つ目、「振り返り」と「改善」。二つ目に示した対話とつながるものだが、これはとても重要なフレーズとなる。

八雲国際演劇祭が今日に至るまで、様々な苦労があったと聞いた。しかし、あしぶえと地元スタッフの方が一緒になり試行錯誤を続けながらも１５年間継続できたのは、毎回振り返り、課題を抽出するという作業を行うことで次回への改善に繋げていることが大きいだろう。

さらに重要なことは、この「振り返り」作業を行う上で大切な約束事が設定されていることだ。それは、否定的な言葉を用いないことと、文章などに形で残すこと。この約束事に、皆で前を向くための姿勢が感じられた。

ここまでで三つのフレーズについて述べたが、何よりこの活動の指針そのものが、あしぶえと地域と行政との話し合いにより作り上げられらたものであることが特筆すべきことだ。

そして、活動指針に表現されているこれらのフレーズは、組織体制上形成されやすい体質があるにせよ、行政に欠けがちなものばかり。自分でもドキッとするような言葉があり、この短い職員生活の中においても感じることだ。もっともそうでない自治体や職員の方々もいるので一概には言えないが、まだ多数派を占めているだろう。

地域協働、もっと言えば協働とは何ぞや、という問いに対する大切な答えを、八雲国際演劇祭の開催の目的と活動指針、そしてあしぶえの方からこれまでの経緯を伺い、さらにスタッフの方々が生き生きと楽しそうに躍動されるのを目の当たりにして、見つけることができたように思う。

組織や文化、考えが異なる大勢の人で何かを達成し継続することを協働とすれば、協働には、一緒になって頭と体を動かし、根幹となるぶれない決まり事と、話し合いを設け、あとは十分に楽しむことが必要なのだ。

こころの食べ物と交流

芸術とは普段の言葉で簡単には表せない抽象的な何か（おそらく感覚や感情、心理、心の深層にある哲学のようなもの）をひとつの具体的な形にしたもの、ということを聞いたことがある。記憶がかなり曖昧だが、だいたいこんな意味だった。

逆に言うならば芸術は人の感覚や感情に働きかけ、人が動く何かのきっかけになりうることができるものだ、と芸術の持つ可能性について漠然としたイメージを私は持っている。

その芸術の一つである演劇が人にもたらす作用について、あしぶえ代表の園山土筆さんは次のようにおっしゃっていた。まず、人それぞれ心の何かを揺さぶること、そして一つには、想像する力を養うことができること。そしてその想像力は相手の気持ちを想うことに繋がる。だから、演劇祭のキャッチコピーはこころの食べ物だ、と。

実際、ボランティアをしながらしいの実シアターで観劇させていただかせた時に、心を揺さ

ぶる高揚感に似た何かと、想像する力を養うという作用を感じた。

当たり前のことだが、劇を演じるのは人であって、役者の息遣いや声のトーン、表現が観劇者の目の前で繰り出される。それが観劇者に役の意図や感情を直に読み取り、想像する機会を否応なしにリアルタイムで与える。そして自分なりに心に残ったものや読み取った意図、感情を何となく、持ち帰る。この一連の作用が、まさに「こころの食べ物」だった。

では、八雲国際演劇祭において、この食べ物が地域にとってどのように作用していたのか。

まず、各会場スタッフのホスピタリティーの高さだ。これは、八雲国際演劇祭を開催するにあたって行った数回に及ぶ集会の時点ですでに、伝わってきた。

次に、"国際"という多文化交流を可能にした、と感じた。

これは観劇に来た友人から聞いた話だが、劇場からバス停を行き来する途中、民家の前で何の変哲もないおばちゃん同士で「あんたの家はどこの国（の人が泊まってるの）？」という会話を耳にして衝撃を受けたと聞いた。

こころの食べ物の作用を知らない人は、おそらく異なる国、文化の、それも言葉もあまり通じない外国の劇団員を泊めるまでにはなかなか踏み切れないだろう。そもそも国際交流は大事だから、と英語を習いに駅前留学する人がどれほどいるだろうか。

演劇を通じて、劇中だけでなく、短い期間であるにせよ、生活までも言葉や文化という垣根を越えていることは驚きだった。

ここに、芸術が人づくりを担う可能性を持つ一片を見た。

話は少し演劇祭から外れるが、現在島根県で地域外との人との交流が活発といわれ、実際 UIJ ターン者（それも若年層）も多い地域へ訪れた時に肌で感じたことは、間違いなく外部の人や価値観を受け入れる感覚がその地域に存在することだった。

もちろん、定住となれば雇用や社会福祉、教育の基盤がまず重要であることは言うまでもないが、その感覚は地域の交流人口の増加につながる重要な要因となっていた。

ここで八雲へ話を戻そう。つまり言いたいことは、あしぶえが八雲に持ち込んだ「こころの食べ物」である演劇と、地元の方と一緒に作り上げた八雲国際演劇祭を通じて、交流を受け入れるきる器を八雲は持っているということだ。

おわりに

さて、ようやく報告も終わりを迎えることとなるわけだが、ここまで読んでいただいた方がいらっしゃれば、誠にありがたいことだ。自分でも思うが、何せ長い。

最後に、全体を通した補足と所感について簡単に触れたい。

八雲国際演劇祭について、あしぶえが今回の演劇祭で呼んだ国内外の劇団は「クオリティが高く、親しみやすい作品」。これは、できるだけ地域の多くの人に演劇を見てもらいたいというあしぶえの願いからだ。

日本各地で行われている規模の大きい国際演劇祭はあるらしいが、地域の完全無償のボランティアメインで地域の人に向けて実施する八雲国際演劇祭は、それらとは一線を画する。

八雲国際演劇祭は、地域の人の、地域の人による、地域の人のための演劇祭だ。そのコンセプトと会場スタッフの高いホスピタリティーあって、今回来場者アンケートにより、演劇と祭りそのものに対する満足度が９割という数字に表れている。きっと、将来的に外からも多くの人を招くことになる。

日本に留まらず、世界の八雲国際演劇祭になることもそう遠くないのかもしれない。

まだ知りたいことがあり、まだここに書ききれないこともあるが、面識ゼロでひょっこり参加させていただいた無知な小生を迎え、そして相手をしてくださった園山土筆さん有田美由紀さんをはじめとしたあしぶえの方々、ボランティアスタッフの方々、繋げて下さった人事課の方々、そして寄付金にまで協力して下さった理解ある松江県土の上司や職員の方々、皆様に感謝の意を表して、研修報告を終わりとさせていただきたい。

【その他特記事項】

あしぶえは演劇活動の他に学校や企業でコミュニケーション能力を養うワークショップを実施している。「演劇は、こころの食べ物」。演じる人を見ること、また自分自身で演じ、表現することにより培われる想像力が、人と人との直接的な対話に生きるという観点から、教育現場からの人づくりにも力を入れているのだ。

今後もあしぶえの活動と活躍に注目していきたい。